

■ 上海に残る写真

1924年(大正13) 11月、第三革命を目指す孫文が来日し、世に知られる「大アジア主義」の講演を神戸で行ったとき、タイミング悪く庄吉が体調を崩していたため、二人は会うことができませんでした。梅屋夫妻は、よほど心残りだったと見え「大正十三年七月十一日写之、贈呈孫文大人、惠存」と添え書きした、庄吉・トクが微笑んで寄り添う姿の写真を孫文に送っています。しかしこのとき、今後2度と会えなくなるとは想像だにしていなかったことでしょうか。孫文が急逝したのはその数ヶ月後のことです。



孫文の移柩祭(いきゅうさい)での写真(※)
前列中央の袴姿の人物が庄吉

■ 中国に孫文像を

孫文亡き後、落胆のあまり茫然自失の状態が続いた庄吉でしたが、周囲の人々の励ましもあり、孫文の業績を後世に伝え、いまだ成っていない革命を実現へ導くため、これまでの集大成とも言えるべき事業に取り組みます。残った私財をつぎ込み、4体の孫文像を制作し中国に贈るという壮大なものでした。



晩年の庄吉

(※)

■ 日中の架け橋

孫文の像は中国からも大いに歓迎され、1929年(昭和4) 庄吉は国賓級の待遇で中国に招かれます。中国政府の相談役という立場で上海に2年間滞在し、日本へ戻った後も日増しに悪化する日中関係を改善すべく尽力しました。しかし庄吉は、中国との和平交渉のパイプ役になりたいと、広田弘毅外相に談判するつもりで向かった千葉県三門駅で病に倒れ、数日後に急逝。日中の架け橋となることを願いつつ最期でした。



庄吉が愛用した羽織(※)
(裏地は孫文の墨跡)